

バシュラールの死をめぐって

——『バシュラールと過したひと夏』とその研究Ⅱ——

越坂部 則 道

バシュラールの死をめぐって

一九六二年十一月二十四日、フランス哲学会は恒例の研究発表会をソルボンヌのミシュレー大教室で行った。発表者はストラスブール大学のジョルジュ・ギュスドルフ、テーマは「人間科学と哲学」であった。司会をつとめるアンリ・グイエは研究会の冒頭で、十月十六日に亡くなったバシュラールを悼み次のような弔意を述べた。⁽¹⁾

ある人物の思い出にふれることをお許しいただきたい、その方は、病に倒れたドミニック・パロディに代り、四年間にわたってフランス哲学会の研究発表会の司会をつとめられたガストン・バシュラールその人で、さる十月十六日に亡くなられました。私たちはみな彼の死に驚きました。長い間御病気で、ほとんど外出なさらないことは存じておりましたが、とても若く、元気な御様子で、というより知的な若さにあふれている御様子だったもので、モニターニューサントージュヌヴィエーヴ通りからの帰りみち、「彼は実際以上に病気だと思いきこんでいる」と考えたほどでした。不幸にして御自身が思っていた以上の御病気でした。あれほど異なった著作、科学者と哲学者と芸術

家が同時に興味を示した著作、その何たるかは、いつの日かこの研究発表会で取り上げられるでしょう、ガストン・バシュラールの生まれ故郷バール・シュル・オーブで執り行われた内輪のお葬式に、この科学者、哲学者、芸術家たちが参列し、彼の遺子にして私たちの同僚であるシュザンヌ・バシュラールを励ますことができました。本質的にはおそらく科学と芸術の詩学であったこの哲学の二面性はこの会で研究されるべきでしょう。とりわけ、この哲学の光輝、この「創造的な豊かさ」のさまざまな効果をあきらかにすべきでしょう、これについてジャン・イポリットは「バシュラールのパンセは今世紀にもっとも大きな影響力をもったものであった」と語っています。そしてこの影響力ゆえに、わが友人が私たちのなかでさらに生き続けることを確信しております。

シャンパーニュ地方の田舎町、バール・シュル・オーブの郊外に町の共同墓地がある。この墓地のなかほど、遠くにこの地方独特の小高い丘を見上げるようなかたちでバシュラールは永眠している。街の騒音も届かず、ときおり風が吹き抜けてゆくだけの静かな環境にある。めったに人間が訪れることもなく、大自然の静寂にかこまれて、死者たちが安らかに眠るにはうってつけの場所といえるかもしれない。

バシュラールの墓は、生前の人柄をしのばせるように、コンクリートでテーブルを形どっただけの簡素なものである。ただそこに横たわっているといった感じの墓である。まわりの自然が四季それぞれに色彩をつけて美しいだけに、なんの装飾のない彼の墓石がかえってさびしくみえる。さびしさというよりは孤独という方が当てているようだ。彼の想像力研究の著作を読んでいるだけに、よけいそのように思われるのかもしれない。春、遠くの丘は菜の花で一面黄色に染まり、真青な高い空の下、春のそよ風を聞きながら、彼は深い深い孤独のなかで眠っている。

バシュラールは「孤独の現象学」を学ぶために想像力研究の道歩んだと言っても過言ではない。「私はといえ、詩人から与えられるイメージにしっかりと交感し、他者の孤独にしっかりと交感して、他者の孤独で私をひとりにす

る。他者の孤独でもって私をひとりにする、深くひとりにする⁽³⁾。孤独な人間は自分がひとりであることを誇りをもち、そこに幸福を見出す。逆に幸福な人間は常に孤独なのである。『持続の弁証法』以来、『空間の詩学』からたいたいま引用した『ろうそくの炎』に至るまで、一貫して彼は幸福の源泉を人間の幼年時代に求め続けるが、それは幼年時代が夢と希望に満ちあふれていたから幸福だったのではなく、孤独だったから幸福なのである。

少年がたったひとり、部屋の暖炉を前にして、その赤々とした火を見つめながら夢にふける姿、これがバシュラールの幸福像だった。ひとりで暗い屋根裏部屋に登ってゆくときの一種の緊張感が夢を刺激して幸福をもたらすのであり、また退屈な田舎で何ごともしない孤独な少年時代だから夢が際限なく広がり、世界は美しく、幸福だった⁽⁴⁾のである。

ところでバシュラールの意図する幸福は単に満ち足りた状態になって、しあわせだと感じることはない。それは一種の力である。簡潔に表現すれば、孤独な存在を上昇させる力とでもいえよう。孤独な存在は別の存在、超越した存在を希求するものである。この願望は常に夢によって実現される。「子供が孤独のなかで夢を見ると、際限ないひとつの実存を知るようになる。この夢想はただ単に逃避の夢想ではない。それは飛躍の夢想である⁽⁵⁾。」夢想には自らを上昇させるような力がある。こうして孤独な幼年時代は幸福の原型として把握されたのである。

実存は上に向って開かれたものでなければならぬ、あるいは前方に向って、いってもよいだろう。誤解を恐れずにあえて要約すれば、これがバシュラールの中核となる人生観である。彼の哲学の根本にはいつも実存のあり方の問題が含まれている。孤独な幼年時代の夢想はこの思想の雛型だった。バシュラールにとって、時間を持続としてではなく創造として捉えるのも「私の孤独な実存」によってであるし、飛躍の夢想を抱くのも「私の孤独な実存」によってであるし、上方の実存を希求するのも「私の孤独な実存」によってである。「そうである、最高の実存、緊張した実存——前へ、より前方へ、上方へと緊張した実存を知ったのは実存の私のテーブルである。私のまわりでは何も

かもが安らかであり、静かである。私の孤独な存在、存在を求める私の存在は、別の存在に、存在以上のものになりたいという途方もない欲求のなかで緊張している。⁽⁶⁾

バシュラールがその長い想像力研究の活動のなかで宗教に言及しなかったのは、このような人生観が本質的にカトリックの教義と相入れなかったからであると明言したならば言い過ぎになるだろうか。少なくとも彼は前方にある存在を求めようとして自らの存在を緊張させたのであり、そのために神または神の存在を意識したことはなかった。

「他者の力」によって自己を上昇させるのではない、自らが自己を乗り越えさせようとするのだ。「ああ、私自身の過去でもいっばいすぎる。他人の過去など私には必要ない。⁽⁷⁾」という自分の実存に対して手いっばいの状態になっているときの彼のぼやきが聞こえてくるようだ。

『バシュラールと過したひと夏』のなかで、臨終に際し彼がカトリックの秘蹟を授かったのかどうかという点が問題になっている。バシュラールの著作を読むかぎり、そしてそこから彼の人生観を類推するかぎり、彼が熱心なクリスチャンであったとは到底思えない。かといってカトリックを積極的に否定したとも思えない。しかし夢想の詩学を構築してゆく過程がカトリック思想とまじわらないということは充分にありえる。それはいま述べたように孤独—幸福—実存のあり方をみればわかるだろう。もしそこに強いて宗教があるとするならば、それを宗教と呼んでよいものかどうかは別問題であるが、彼にはもつと原始的な感情があったのではないだろうか。自然に対して、人間存在に対して、彼には宗教以前の感覚、まるで古代のギリシャ人を思わせるような非常に優れた直観力があつたような気がしてならない。その彼がカトリックの秘蹟を受けたという事実に対し、レスキュールは初め少し動揺したようだった。彼は本を読み直し、バシュラールがカトリックに「改宗」したとしても心理的には変化がなかったという論拠を必死に探し続けたようだ。しかし秘蹟を授かったから、それまでの彼の思想を別の角度から検討しなければならぬというものではないし、それによって生前の思想が色あせるといふものでもない。それでも、バシュラールは神に召されて

最終的に孤独から解放されたという方向でこの問題を捉えるならば、明確にこれを否定しなければならぬだろう。バール・シュル・オーブの共同墓地に眠る彼、その墓から感じとった孤独感はどこから来るのだろうか。墓地の静寂からでもあるし、そのまわりの自然の美しさからでもあるが、なによりもまず、他の墓石が十字架などをごてごてと飾りつけて自分がキリスト者であったことを固持しているのに対し、彼の墓には十字架も胸像もなく、石のテーブルが置かれているだけだった―これこそが「実存の私のテーブル」であるとも言いたげに―ことによるし、またその墓碑銘からでもある。墓石にはただ名前と生没年しか刻まれていなかった。死後二十五年が経過してコンクリートに刻まれた墓碑銘も消えかかっており、あと二十五年後にはこのテーブルの下に誰が眠っているのかさえ分らなくなるおそれがある。しかし、これは私のひとりよがりかもしれないが、十字架で飾られるよりもその方が安らかに眠れると彼は思っているにちがいない。

バシュラールの死をめぐる、今回は『バシュラールと過したひと夏』のなかの「死」の章を訳すことにする。彼が死んだあと、レスキューールはいっそうバシュラールの存在の偉大さを悟り、生前に彼とかわした会話の内容をもつと日記に書き残しておくべきだったと後悔する姿が率直に表現されていて面白い。死んだ人間はとかく良く言われるものだが、そういったことを差し引いても、レスキューールの文章の行間からはバシュラールという人間のあたたかさ、がにじみ出ている。バシュラールの友人たちは、彼の思想に引きつけられるのと同様、彼のあたたかい人柄にも引き寄せられてモベール広場に通ったのではないだろうか。レスキューールのこの本を読むと、そんな気がしてならない。

バシュラールと過したひと夏

XI 死

『焔は消える、眠りながら消える』

バシュラール

一九六二年の初夏、私は一通の手紙を受け取ったが、その文面に不安なきざしなど少しもなかった。

……シュザンヌは相変わらずアグレガシヨンの審査委員として朝晩働いています。今月末まで続くでしょう。そのあと娘はここを少し片付けたがっています。ディジョンへ行くのはそのあとになるでしょう。私は恐いのです。モベール広場と同じくらい人間味のある広場を他のどこで見つければよいのでしょうか。

そして私は観察者と観察されるものとのあいだでくりひろげられるドラマを作りながら時間を過しています。自分の原稿を観察者として読んでいるのです。日がな一日、くさびを締め直しています。でもときどき、観察されるものもまんざらではないのではないかと考えることがあります。

七月二十三日付の手紙だった。そこに不安な点などなにもなかった。もちろん筆跡には疲労がみられた。手紙は沢山のインクでべとついていたし、上手に書けない手紙もあった。しかし私は疲労の原因をセルジャンーマジョールのペンのせいにした。観察者のくだりに笑いをさそわれ、言うことをきかないペンと格闘しているバシュラールのいら

だちを想像してほえんだ。

私のペンからインクがもれると、考えが横にそれる。

いつ終るともしれない質問をしながら真直にものごとを考え、真直に切り込んで来て、私たちを高ぶらせることがよくあった。七月中旬から私はレ島にいた、そこではエリユアールの十回忌の仕事をしたり、また動物のように動きまわり、デュシャトーに勝とうとしてラストスパートをかけ、ももの肉離れを起こしたりした。九月の初め、パリに帰ってくると、ルネ・シャブリが肺ガンにかかってまもなく死ぬことをさとり、それを勇気強く待っているのを知って、つらい現実世界にひき戻された。手紙を読んでバシュラールがディジョンにいるものと思いついて、また夏の終りが美しかったので、モンターニュ・サントージュヌヴィエーヴ通りには行かなかった。十月十三日になって天候が崩れた。一気に秋が来たのである。

十月十三日

今朝は秋の天候である。いまにも霧雨が降りそうで、うす暗く、木の葉が寒々しい。輝かしいばかりのこの二週間が経ち——シュザンヌに呼ばれた。バシュラールが死にかかっていた。おそらくまだしばらくは大丈夫だろう。主治医のマラルメは当惑しながら、まるで中世の人間を治療するみたいだとピエール・デヴィーニュに打ちあげた。彼が言うには「二十年この方、魂は肉体の存在を忘れていた」ということだ。今後は苦痛をのしるためではなく、苦痛の治療をするため、バシュラールに自分自身の苦痛に関心をもってもらわなければならない。彼の歳になると動脈炎は悲劇的な結果を生むおそれがある。治癒の途中で潰瘍化が始まると、細胞の壊死が起こるだけに重

大である。前の主治医は六年前に白血病を見つけたが、シュザンヌにそのことを打ちあける決心がつきかねた。二年後、土壇場になって彼は第三者に手紙を送り、そのことを書いた。そうして彼は死んだ、がその手紙の受け取り人が今度は転送しなかった。したがって白血病は治療されないままに残った。その当時ならば手のほどこじようがあった。いまとなっては全身状態を監視することが動脈炎に対する確実な治療方法になるだろう。でも日常の暮しにはたくさんの問題がある。たとえ自分の肉体をなおざりにしようとも、生き生きした魂をもったバシュラールが解決しなければならぬ問題である。彼の最後の著作の結びとなった質問、「よく知っている働き手を見い出す時間が、そして私の彫刻のなかに彼を刻み込む時間が私にはまだあるのだろうか⁽⁸⁾」という質問に対して、肯定的に答える時間を誰に残さなければならないというのか。

十月十六日 火曜日

バシュラールが午後十二時五十五分に死んだ。十二時三十分、昏睡状態から醒めて時間を聞いた。声がとても弱かった。シュザンヌは十二時三十分と答えた。彼には聞こえているようだった。もう一度彼は「疲れた」と言った。それから目を閉じた。呼吸が少しずつ弱くなった。彼はまさに消え入るように息をひきとった。

私には失ったものを考えることすらできない。三日前の晩、彼は何か重要なことを言い残したいと思った。看護婦を呼んで娘に電話を下さいと言った。しかし断られている。カンギレムに電話をと言ったが、それも断られている。レスキュームに電話を。「でも私は電話番号を知りません」と看護婦は言った。バシュラールは口述をしてもらいたいと思ったが、結局あきらめたのである。

その機会は失われてしまった。ときどき私はこうして、街なかで彼の死のことを考えてきた。その準備をしてきた。私には耐えられないと思われた。でも現実はその時がやってきたのである。今晚私たちの家にシュザンヌが泊

まる予定だが、彼女の世話をすることは、私たちにとって多少平静を取り戻すことになるし、元氣を取り戻すことにもなるだろう。

彼の書いたものには全部重みがある。どの本にも、それ以上付け加えることは何もないだろう。書いたあとで検討が必要になるのは、ただ個々の文章に対してだけである。

彼はとてもやせた。包帯に包まれた顔はもはや天才的な哲学者の顔ではない。多分、彼にその気があればなれたかもしれない農民の顔のようであるが、そこには精神的な気品が満ちあふれていた。「死は生者の顔をおおう仮面である。死は絶対的な仮面である。」

エリュアールの十年後に―バシュラル。

ポールのときと同じように、また涙。迷信、あまりにも美しすぎる十月―ろうそくの炎―そして十年前このコートは私に不幸を告げたのに、今日この緑のコート、再びこれを着用していたのである。

十月十七日

私たちには失ったものを取り戻すすべがない。歴史は難局を切り抜けてゆく。世界は動いている。でも私たちは…。彼のような人間はどの世代にも三人としないし、もう二度とあのような人間には会えないだろう。私たちが身の貧しさが感じられる。

何か言いたいことがあるので友だちを起こして口述したいと真夜中に言いだしたひとりの老人の心の動揺を、あの看護婦にどうやって理解させることができたのか。何が起きたのか見分ける能力がないので、もう二度と口にするのできないいくつかの文章をこの世界から自分は奪いとってしまったということを、彼女にどうやって分ら

せようか。

ちらちら盗み目をし、じわじわと締めつけ、あるときは不明瞭にあるときは明確に言いながら、悲しみをこらえるそぶりで悲しみを演じて、もっとも高いものを売りつけようとする葬儀屋の従業員の金もうけ主義。この柩が他の柩よりも安いのかどうかたずねたときの攻撃的な視線に立ち向かわなければならぬ。その眼のなかに「あなたは故人をあまり愛していなかったので、そんな事に関心を払う」とでも言いたげな非難を読むことができる。

十月十七日

シュザンヌは葬式を宗教的に行わないという考えに対してすっかり途方にくれていた。彼女の父は何を望んでいたのか一度も言わなかった。私は彼女にこう言ったのである。「宗教が彼の思考の対象だったとは思いませんし、教会の神様や信仰上の神様もそうではなかったと思います。なるべく目立たないように、逆らわないようにしたらよいでしょう。」

十月二十日

今日は悲しみの日である。きのうの朝バールーシュルーオーブ、秋の霧がかかり、涙ぐみ、輸送用に柩がろう付けられていたけれど、古い教会や田舎の墓地には甘美な美しさがあり、丘の斜面が近くに見え、オルガンが鳴り響き、真の友人たちが参列した。グイエ、ダゴニエ、カンギレム、フロコン、リシュネロヴィッツ。ゆっくり流れる川に沿って、昔、日課のように行っていた散歩道を見つけた。でも今宵私は早くに目が覚め、再び眠りにつくことができない。

ここへは私たちの夜の語らいの痕跡を探しに来ている。いや、ちがう、夜の語らいは私の生活に密着していたの

で私はほとんど書きとめていなかった。結局時間が経つにつれ単純になり装飾されて、やがては修正された思い出ししか残らなくなるだろう。覚えておかなければならないとすれば、それは私がベルを押すとドアが開いて『おや、レスキューール』と言ったときの彼の驚きである。手を差し出し、私が『おじゃまではありませんか』と言うのをさえ切って、『どうぞ、どうぞ』とつぶやき、ほとんど毎回のように少し声を低くして『シュザンヌは仕事をしているんだよ』と続くのだった。寝室兼書斎にはいるとすぐに私たちは腰をおろすが、彼はその前に『ともあれ、お子さんたちは元気かい。』と聞くのだった。それから人のよい彼は私にいろいろとアドバイスをしてくれた。もし私が少し煮え切らない態度をとると『いや、ちがう、きっと好転するでしょう……』と言った。私を安心させ、面白がらせようとして、また思うに、語らいのじゃまになりそうなものを二人のあいだから全部取り払おうとして、口にすべき単語や冗談をさがしているときのひげの動き、いたずらっぽいまなざし。感嘆符と疑問符が同時についた、唐突な、しかも感じのよい『ねえ! ?』と言うのも彼の流儀だった。そうしたものがすべて値のつけようがないほど高価なものになり、睡眠を遠ざけているのだ。

墓地が教会からかなり遠くにあり、シュザンヌが疲れるのではないかと思ったので、ジャンヌ・アヴェーと私は車を探すために葬列から離れた。私たちは直接墓地へ行った。学校付近の通りで生徒たちの姿を見ることはできなかった。その理由は第一に、ある程度バシュラルに興味を持っていて生徒がいるとシュザンヌは信じていたけれど生徒数がさほど多くなく、点在するようになるためであり、次に霊柩車が進むあいだじっと動かず、両手を組み、沈黙して人垣を作る子供たちがまさかそれが自分たちの先輩の通過だとはおそらく思わないだろうという理由からである。それを望んだのは高等学校（あるいは中学校）の校長である。実際それは正しい処置であった。

そのあいだ私は『午後のプレリュード』を書いていた、私にしては海洋的な内容で、大西洋をおおう透明な空と

まじりあった「想像的な」ものである。そしてそれは海のなかの死に非常に似ていた。オーブの南、サントージェルメヌの丘は、午後、緑と金色に輝いていた。そこは若かりし頃の散歩道、十五キロメートル四方まで娘を引き連れた父親の散歩道であった。それから三十年以上が過ぎ去った。彼はほとんどいまの私の年齢だったのである。

十月二十一日

私は帰宅して、いままで何度も聞いた声に耳をかたむける⁽⁹⁾。

私は丘の斜面をよじ登ってこの丘の素晴らしさを味わいました、あるいは私の丘をたたえたと言いましょ、バールーシュルーオーブの近くに素晴らしい森があります。私はそこを散歩したものです。結局この散歩の痕跡がことごとく私の人生に残っています。ただ当時の私は自分が健脚家であることに満足していました。ワインを飲むためビストロに立ち寄るのが好きでしたがこのワインももう私の手には入りません。アメリカ人のためのシュンパーニュになりましたから。

これは六ヶ月前のものである。私はこれからも絶えず聞くことになるだろう。

バールーシュルーオーブの家にいた子供の頃、丘の上に森があるのを知りました。ボワーデーダムと呼ばれた神秘的な森ですが、当時は散歩をしたものものとりわけ母のせいでこのダムの森のなかには入りませんでした、道に迷うからです。どこでだか忘れましたが、私はこのことをすでに言ったはずです。この森のなかで私の祖父が

道に迷い、祖母も道に迷いましたが、もう百年も前のことです。私はその森に入りました。そのなかを進みました。ボワーデーダムでは一度も道に迷いませんでした。いつも背信するような気持で森に入りました。そこはまたタバコを吸う森でもあったのです。御存知ですか、つる植物を切ってそれを吸うのです。私たちにとってタバコを買うなんて問題になりませんでした。このボワーデーダムの森は確かに私の心のなかに痕跡を残した森なのです。ときにはそこを横切って見事なワインの国へ行くとよいでしょう。でもたくさん飲んではいけません、というのもそれがなかったら。帰る途中で必ず道に迷うからです。このワインにもう私は再び会うことができません。

十月二十四日

まだ最近の過去の映像がちらつき、声の抑揚が耳に残り、ひとつの身振りが消えてはそれを取り戻そうとして上手に思い出せないことが続き、毎朝早くに目が覚める。この身振りはちょうど跳躍する前に精神を集中させてうずうずするようなもので、せわしない動きである。彼は飛びかからんばかりに相手の話を聞くとときがあった。いすから乗り出してむさぼるように聞き、それが何なのか知る前に言い返そうと準備する。こうした動きが全部解放的に行われたのである。まるで試合をするかのごとくに会話が始まったものだった。そして最後のことばを機知で締めくくったとき、どれほど彼はほっとしたことか。どれほど笑ったことか。適切なイメージを相手が見つけたとしても笑い方が弱くなることはなかった。

彼が「前方に」と言ったように、彼にとって人生は常に『少し上の方に』あった。思い出は半分しかお気に召さなかった。思い出をほとんど信じなかった。拒絶した。『幼年時代の思い出は語られた思い出です。幼年時代の思い出に浸ると歴史家になりすぎます。』ラジオで放送された、オディベルティとの会話のなかで、彼はこのように

言った。

彼のことばをとりいそぎ収集すると、「世界は最初の安らぎであり、世界に投げ出されるのではない、世界に迎え入れられるのだ。」「決して偽の子供にはなれない。子供は退屈するにちがいない。私は新しい存在者だ。」ある日彼は私に言った『ああ、子供のように私は退屈できた。』彼の「哲学」には、そして彼の得た英知には、ほとんど思い出の余地がないように思われる。いま述べたように。しかしエネルギーとして幼年時代、救済としての幼年時代ならば、そんな事はない。現在の気晴らしとしての思い出を彼は拒否するのである。ひとかたまりになって激しく高揚する過去、くめども尽きぬ過去を、豊かな現在のなかに要求する。おそらく甘い思い出はない。幼年時代は甘い瞬間ではなく、驚嘆の瞬間である。彼が思い出に対して抱く不信感は、おそらく、彼にとって人生は実際常に発見であり、出来事であり、到来のように思えたところから来た。彼を驚嘆させたのがこの到来であった。

このようなイデーが戦争中私たちを魅了したものだが、当時われわれグループの考えがごく自然にまざり合っていて、今日では各自のもっとも独創的な考え方が何だったのかももう分らなくなっている。あの当時バシュラールに会ったことのなかったバタイユが私との会話のせいで自分でも知らないうちにバシュラールの影響を受けたのである。共通のイデー、歴史の共通の瞬間が生じる。ふり返ってみると、非常に独創的な考え方が自然に大きく併合されたことに驚く。

十月三十日

ルネ・シャブリが死んだ。

十一月六日

疲労。たくさんの死から立ち直れない。病気になると思ったほどだ。今晚電話したシュザンヌは体の調子がとても悪いので、明日リールに行くそうだ。

ほとんど流れのないオーブ川の、わずかに灰色がかったあの光に、私はいつもひき戻される。丘の上の森は夕方になると青白い霧がはれ、空気に加減で赤や緑や金色が入りまじる。(ダゴニエとカンギレムと私は) 昼食に白ワインをたくさん飲んだせいで、いたずらっぽくなっていた。ゆったりと流れる川、そのうしろの黒っぽい用水路、橋桁に大きな枝がからみついていた。そういった風景は永遠に消え去らないだろうと思われる。この一ヶ月間私のできたことが全部忘れ去られ、甘くもの悲しいこのたったひとつの映像だけが認められる。

「認識するという行為はその生まれた状態で把握されなければならない。」二十八歳のときにバジュラルの書いたことが私の人生を支配し、私の詩の仕事全体を支配した。ただ後年になって、把握されるやいなや認識は変色し、(それゆえ、と彼は続けた) 重要なのは行為の結果ではなく、誕生そのものであるということ。私たちはそこに付け加えた。そして絶えざる着想と不断の発見をくり返す、ほとぼしるような哲学に入っていた。何ものも彼を閉じこめることができず、何ものも彼の飛躍を止めることができず、何ものも彼を停止させることができない、彼はそういう哲学者だった。とりわけ「彼の」真理がそうであった。いかなる瞬間にも、いかなることばにも、いかなる訪問者にも、いかなる人物にも、彼は飽きずに飛び込んでいった。そこに入るやいなや沸騰が始まるのだった。

十一月二十一日

精神が解放されるとすぐ彼の不在にぶつかる。午後、少し雪の降るなか、イッシーから歩いて帰る途中、空気が

ここちよく、まぶたのちよっとした熱ならば散らしてくるだろうと考えてそっと涙を流した。

ひとりの哲人を想像しなければならぬ。いたずらっぽさとやさしさ、彼のまなざしを非常によく形容するこのふたつのことばを、休息の夢想の結末で見つけた。「誰が私たちをたたえるのか……やさしさといたずらっぽさのまなざしを持ったワインよ、愛しながらもじらすワインよ、おお、私の国のワインよ。」⁽¹⁰⁾

学校を人生の目的とし、最後まで学ぶという考え方に彼は驚嘆した。「私はもっと学びたいという気持で心はやる、それも白い紙を離れて本から学びたい、難しい本から、私には少し難しすぎるような本から学びたい。」⁽¹¹⁾彼は死の間ぎわにあったが、まだ若く、純粋な若さを、もっとも力強い若さをもっていた。

この教えを聞いて私たちはこの学校に永遠にいたい、そこを目的にしたいと思った。白い紙を先生の先生とし、沈黙を哲学者の話と同じくらい教育の詰まった先生とし、そのことばを沈黙と同じくらい魅惑的な教えとしながらである。

アントワヌ・マルシャルの求めに応じて引き受けたバシュラールについての記事が上手に書けない。私にそれを頼んだのが友人であり、私には始めることが必要なので、この仕事に執着した。手短に言くと、思いきって始めたのである。しかし多分あまり言いたいことが多すぎる。四、五ページしかないのに、すでに十ページに達し、しかも本質的なことは何も言っていない。バシュラールのテキストそのものに沿っていないことは何も言うまいと気を使い、隅から隅まで知らないことを残念に思い、彼を裏切ることが不安なのである。自分が馬鹿になったようだ。彼の最後の手紙を読みなおし、ほとんど個人的な思いを寄せるようになったページを読み返して、困ったことに再び涙。この四分の一世紀のあいだのたくさんのやり取り……。たくさんの質問と答。たくさんの冗談。夕方六時頃、モベール広場への道をもはやたどれないという思いに、いまだに耐えられないのである。

一九六三年七月十二日、レ島

いつもの夏のように——ここに到着するやいなや……

…あの豊かき、あの勇氣はもはや存在しない。まだ湿った瓦にふりそそぐ七時の太陽の美しさ、感覚の世界へさそう大洋、そういったものの湧出を一体誰があれほど見事に高められるのだろうか。彼はあらゆるものからエネルギーを引き出し、自分の喜びにした。言語を、ことばを、もっとも誇れる喜びにした。

七月十六日

存在することの驚きとバシュラールは言ったものだった。「ある」ということにほう然となる。彼は世界のどのような出現に対しても目覚める。しかしそれ以上になぜ芸術の出現なのか。なぜエックスの背後にそびえる山よりもセザンヌの描いたサントーヴィクトワールに「ある」がたくさんあるのか。言語が世界をつくる。そしてバシュラールがいる。

一九六六年七月二十二日

バシュラールは死にぎわに『いま何時か』とシュザンヌに聞いた。彼女は十二時三十分と言った。そのあと『疲れた』と彼がささやいたように思う。私の父はかたわらに二つの時計を置き、ねじが巻かれているかどうか注意した。時計が止まったことに気づいたとき私が自分でねじを巻いた。トイレに行くため父が夜中に起きたときなど、ナイトテーブルに置かれた腕時計の方に父の腕が震えながら伸びるのを見たものだった(父のイニシャル入りのふたが付いたもうひとつの方は、小さな釘で壁に引っかけられていた)。私は父が望んでいたことをたずねた。『今、何時。』午前二時だということが分ると、『まだ五時間待たねば』と言った。

なぜ五時間。父は何を待ったのか。日の出だろうか。しかし電気よりも日の光の方が疲れるのでカーテンを閉めておくように、と父は言った。この電気のあかりに対しても、父は必要に応じて眼の上に厚いハンカチを置き、そのあかりから身を守った。それでは食事だろうか。八時前には食事をしないことになっている。おそらく待っているのは「昼間」だろう。活動が戻ってくる瞬間であり、女中が家事にいそしむのを聞く時間（しかし父に聞こえるのか）、通りが活気づき、清掃人が通り過ぎ、金物屋が音を立てて母の眠りをさまたげる時間である。しかし本当のところ、ぐったりと疲れた夜の底で父が何を待っていたのか私にはまったく分らなかった。

バシュラールと過した晩の語らい。それについて私はごくわずかなことしか記さなかった。私たちはこの語らいを楽しくしようと気をつかった。私は人に教えてもらった「とてもおもしろい話」を彼に話さなければならなかった。実話、役所の愚さ、人間たちの淫売生活などが絶えず彼を驚嘆させた。非常に上手に避けてきたこの社会の愚行を知って彼はびっくりした。いつまでも私におしゃべりをさせ、また彼が楽しそうに笑うので私もまたしゃべり続けた。毎回私は話を貯えなければならなかった。

彼が死んだとき、白血病だと知りつつも治療をせず、何も言い残さなかった主治医の無分別に、大いに腹を立てたものだ。事実彼の生命を数年延ばすことくらいやさしいことはなかっただろう。病気よりも病人の方が大事であるということが当時の私には分らなかった。自分の生と死を望み通りにしたいと願う患者を前にして、病気の治療になれた医者がまったく何もしていないということが当時の私には分らなかった。

バシュラールの治療をしたマラルメがピエール・デヴィーニュに言った。『この二十年のあいだ肉体があるのを忘れていた魂に私はたっぴま出会ったところですよ。』彼にそのことを思い出させるのは可能だったのか。肉体を忘れていたとしても、忘れる権利というものはなかったのか。無頓着からそうなったのか、あるいはむしろ意図的に忘却したのだろうか。彼にそのことを思い出させるのは、真の生に対する妨害であり、彼の思考に重圧を加える

危険性がなかったのだろうか。人間には何にも邪魔されずに死ぬ権利があると父は言った。つまり人間には自分の死を選ぶ権利がある。もし生が死を選ぶのでなかったら、死とは一体何なのか。私が期待するからではなく、医者が自分から特殊な例外として彼を長生きさせることができるはずだと思えば、彼に自分の肉体を明瞭に感じさせることと同じである。

いまでも好きな人たちは死んでもう居ないという事実を受け入れるために、そんなことを自分に言いかせるのか、あるいは死が私の生の一部分であり、自分自身以外の誰か他人に死をまかせられないと思い始めているのだろうか。

『ロートレアモン』の七十九ページでバシュラールが語った「純粹な意志」を「純粹意識」に結びつける必要はないだろうか。彼はそこで感心すべき衛生学を述べている。「もっぱら内的な肉体訓練を取り除いて、衝動の純粹性を求める性格が体験できたとき、筋肉運動をする決意のよろこびをわれわれに残しながらも、それをしないで済ませる一種の中心的な体操が構成されるようになる。」「何もしない意志」というのは実際には決意する意志、精神の意志である。自分の肉体の忘却は動き回る人間、活動的な人間、さらによく言えば「活動人間」に対する反論である。

バシュラールはその人生の終りに、何にもまして自分が魅了されたのはドイツロマン派の詩である、と私に言ったものだ。彼はシュールレアリストにあまりにも過度な精神を見出した。「彼らのイメージは非常に精神的である……」

私は、ノヴァリスのこと、死の意味のこと、ロマン的魂の魅惑のこと、ゾフィーに割り当てられた、奇妙な分身の仲介者という役割のこと、そして最後にバシュラールの主治医が言うところによれば彼がついには自分の肉体を忘却したという、その忘却のことを思った。

直観。裏切りについて、「裏切られた将来」についての驚くべき文章、「もっとも残酷な不幸は裏切られた将来の意識である」。長い省察の末に裏切りの観念が再びあらわれる、今度はメーテルランクから借用されて、その観念が許しの世界に加わるのである。「あなたが愛しているとしても、あなたの運命の一部分をなしているのはこの愛ではない。あなたの人生を変えるのはこの愛の底にあるあなた自身の意識である。あなたが裏切られたとしても、重要なのはこの裏切りではない。あなたの魂のなかに生まれた許しである。」とメーテルランクは言った(『知恵と運命』)。

許し。それは無神論の世界で考えられる観念なのか。日常生活では人は許すことをしない、忘れるかそれとも折り合いをつける。「押しつぶす」。美しい寸言。でも許すとは。『新会員』の最後のページで次のことを読まなければ(体験しなければ)ならない。それはバルザックの衝動的な洞察力、直観である。「イエスの名においてあなたを許します：」とラ・シャントリー夫人が言った。神のためにはじめて許される、許されることができる。バシュラールになぜこの「許し」があるのだろうか。

死のために彼は裏切られた。結局死を望んだのではないにしても受け入れたと思わないでいられようか。ノヴァリスにおける死の神秘的な意味に似たものを想像しているのではない。また結局バシュラールが自分から望んで、死んだ愛する女性に追いつこうとした、ということの意味するでもない。はじめからかくも激しく活動した生にとって、死の不意打ちのせいで、最愛の人が死へ逃げ去ったということがありえなくはない、ということの意味する。至上の實在になったのがこの不在ではないのか。不在のすばらしき實在。

バシュラールは死をまさに生の条件としながら、この實在に答えるのだろうか。瞬間は消滅したあとでしか再び生まれない、人間は転換することによってしか存在しない、フェニックスは燃え尽きたあとでしか輝かない。しかし許しは……。彼はほかのどのような世界で輝いているのだろうか。

R・P・テリヤンはバッシュラールについての博士論文を準備しているが、その彼のせいでこの一年間私はバッシュラールの問題に追いまわされた、しかしこの数ヶ月彼から何の音沙汰もない。最後に会ったとき、バッシュラールが死ぬ前にいわゆる「秘跡を授け」られ、教会の秘跡をたずさえて埋葬されたということ（勝利感に満ちた調子で）私に明かして帰っていった。『そのことを知っていましたか。』『いいえ、それについてはほとんど関心がないもので』と彼に言った。ただ非常にはつきりと覚えていることは、ミサに送られながら教会で葬儀を行うのか、民法にしたがって無宗教で葬儀を行うのかという問題がシュザンヌに起きたことである。シュザンヌは迷っていた。家族の一員たちは彼が教会の手を煩わせるかもしれないという考えに動揺した。ほかの人たちはその反対であった。私はどうしてよいかわからず、結局バッシュラールの宗教感情はさほど真剣ではないと思われる（友情をつらぬいた二十五年間彼は宗教について私に一度も話したことがなく、少しも遠慮するような様子を見せずに私の不可知論の表現を許してくれた）、がその代わり、ごくわずかにそれと指摘できるような性質の解決案をひかえ目に選んだことは確かである、と彼女に言った。『パール・シュル・オーブで無宗教の埋葬を行うことがスキャンダルになると思うならば、教会へ行きなさい。でも政治的目的のために自分が利用されることほど彼をいら立たせることはありませんよ』とシュザンヌに言った。そして私たちは教会に行ったのである。

その点についてテリヤンは、勝利の喜びと私に教える喜びを（思うに）おさえるため声を落しながら私に言った。『彼が死ぬ前に秘跡を受けたのは確かですよ。ぼくには証拠があります。病院の司祭がそれを請け合ったんですから…』いずれにしてもそれは疑いたくないことである、それというのも、臨終がせまった患者の枕許での司祭の粘り強さは誰もが知っているからである、それは感心ともいえるし、見方をかえれば吐き気を催すほどである。彼らは信じているのだ。死を迎える患者がどのような状態で彼らの粘り強さに負けるのかは想像できよう。『それがうれしいのなら、続けることですね…』

『いずれにしても、それはありえることです。私は何も知らなかった。それだけです。』と私はテリヤンに言った。このときすでに玄関マットの上にいた彼はさらに声を落しながらも確固として『そうなんです。ぼくには証拠があるんです。あなたに教えてすみません。でも事実なんです。』『なぜ』と彼に言った。『すみません、すみません』と彼は勝ち誇るように言った。それでもやはり私の考えは何もかわらないと彼に言う必要さえ感じなかった。

一九七七年六月二十六日

プチット・ダムの手記のなかで彼女が語るには、ジッドが死ぬ二週間前、彼は「ノートを書きながら息も絶え絶えに押しひしがれている」ように思ったということである。『少し横になっては……そんな風に体をかがめると呼吸するのが大変でしょう。』彼はほとんど悲劇的な顔つきで答えた。『そう、でもこれはとても大事なことなんだ。』バシュラールが死んだ前日、私を呼んで何かを言い、おそらく口述して欲しいと彼が要求したのを聞いて、それがどれほど重要なことなのか私には分った、肌でそれを感じた。その晩私に言ったかもしれないこと、まだ言うことができたこと、そして彼には言うことができなくなったこと、もう二度と言われないこと、それは重要なことであつた。存在したかもしれないことがこの世界から失われてしまった。私は永遠にそれをもぎ取られたままである。

旧友だつた彼は突然あきらめて、『そう、あなたは正しい、申し訳ない』とでも言ったのだろう。このとき彼は死ぬことを、息吹とことばの喪失を、何もかも終ることを受け入れたのだ。朝シュザンヌに看護婦のことを語りながら『昨晩は彼女をとて悩ませてしまった』と言つた。それから少しあとになって『いま何時』。そして彼は自らを放棄した。

「そうだ、死の冷たい指が臨終のせまった人間の眼の上に置かれると、視線の光はどこへ行くのだろう」

パシュラール

私はこの『夏』に関してまったくあぶなっかしい方法で仕事をしている、つまり運をあてにして、あれこれの本、あれこれのページを偶然に読み直し、思いがけない重複、例えば啓示、解明、知性、「輝き」、驚くべき観点といったことなどが偶然に整えられて重複するのを期待しているが、突然、『瞬間の直観』の数行を、いままで一度も読んだことがなかったかのように、まったく異なった風に読んだ。

「時間のあらゆる力は刷新的な瞬間のなかで凝縮する、その瞬間に、シロエの泉の近く、あがないの神々しさ（訳註、または「聖なるあがない主、イエス」に触れて眼が開く、この神々しさ（訳註、または「あがない主」）は同じしぐさでよろこびと理性を、そして真理と慈愛で永遠になるための手段を私たちに与えてくれる。⁽¹⁶⁾」

私は「あがないの神々しさ」に飛びあがった。

以前読んだとき私のなかに入ってきた単語はとりわけ「真理」と「慈愛」だった。しかし今回まさに私を飛びあがらせたのが「あがないの神々しさ」（訳註、または「聖なるあがない主」）である。どちらが名詞でどちらが形容詞なのか。どちらも大文字で書かれていない。神々しさがあつて、それがあがなうのか。それともあがない主が存在して、そのお方が神のような性質なのか。問題は、超越の照準、「魂の緊張状態における調和」が私たちに与えるのはエネルギーなのか、それともキリストなのか、ということである。

私は数ページあともどりをした。そこで「私たち自身の精神にとってもっとも有効な助けとなるものをこの本から取

り出す⁽¹⁷⁾」という文章を見つけた。バッシュラールがここで言ったことは、ひとつの救済として、人間を救うものとして、「助け」それも「もっとも有効な助け」という生の深い賛同の告白であり、そのことは疑うべくもない。

この文章は、ルプネルが神にことばをかける『シロエ』の場面の引用

「不可知なものを説明する原因ではないにしても、少なくとも不可知なものが逃げてゆく形態を私たちが知覚するとき、もはや私たちの手の届かないところにこの不可知なものがあるというのではない⁽¹⁸⁾」のすぐあとに出てくる。不可知なもの。私たちは教科書的な合理主義から離れたところにいる。「したがって私たちの欲望、希望、愛は至上の存在の外側で描かれるだろう⁽¹⁸⁾」とバッシュラールは付け加えた。

希望、愛というのは神学用語の単語である。「至上の存在」がもし神でない、神のようなものでないとするならば、それは何なのか。そこに到達すること、逃げてゆく形態に到達することは可能なのだろうか。

「このとき光は理性から心へと移る⁽¹⁸⁾」

ふたたびルプネルを引用する。「愛。事物の性質を構成する内的な一致と全宇宙を実現する厳粛で壮大なリズムを、私たちの精神性にふさわしいことばで包むには、ほかのどのようなことばが可能だったのか⁽¹⁹⁾」

「これらの愛すべきページを読むと、あらためて自己自身のシロエの神秘的で内的な泉にむかって詩人が進んでい
るのを感じる。」そして「私たちにあってそれは夢を追い求める努力というより、愛の合理的な性格を見出す努力
なのである⁽²⁰⁾。」とバッシュラールは言った。

愛という単語は大文字で書かれている。それはひとつの徳である。「心を強化するにはモラルによって情熱を二倍
にしなければならぬ⁽²¹⁾」ランボーと同様にバッシュラールが永遠ということばを言うのは、私にとって何という驚き
だろうか。

「したがって私たちの存在は心のなかで、理性のなかで宇宙に通じ、また永遠を求めている⁽²²⁾」しかも大文字であ

る。
これが仮面をとった死の正体なのか。死に瀕して非常に長いあいだ恐れおののかしてきた絶対の仮面を取り除いたのだろうか。

テリヤンが強い調子で私に告げたいと思った「新事実」にいらいらしていたとき、思うに私はふたりのあいだの宗教色のない教育のロゴスで一杯になり、相当軽率だった。おそらく教会の儀式は、私が考えた以上に、バッシュラールの「夢」と一致していた。彼があえて表現した純粹愛に近づけば近づくほど、逃げ去るものをつかまえるということばの意味に近づくことになる。

秘儀伝受、それがどうしたというのか。それをしない人もいた、不可知論者マルローである。彼もまた死に瀕し、理性に疑問を抱きながら、それでもわれわれのもろさを受け入れるには至らなかつた。「もともと人間の精神から逃れ出た世界のことをどうしても考えたくなる動物が人間のなかに存在するということは、あきらめざるをえないのだろうか。さもなければ大切な精神的出来事があらゆる予測をも拒絶したのを思い出すだろう。」(『東の間の人間』)
このとき悲壮にも彼はどのような「精神的出来事」に呼びかけたのか。

もし私が闇の世界に入り、「……『ほほえむ悔恨』が私たちを死に誘い、子守歌のような、物質の単調なリズムに誘う⁽²³⁾」ということば―バッシュラールはこのことばのなかで三十年後の肉体的死を、自己自身の死を夢見たと私には思える―だけがよりどころになるならば。

この物質を前にして、私はどうしたら迷わないでいられようか。どうしたら私たちの作る「観念」を守り続けることができるだろうか。

- (1) Bulletin de la Société française de Philosophie, 57^e année, No. 3, juillet-septembre 1963.
- (2) バシュラール生誕百周年の記念の年、一九八四年十二月一日に、クレルモン大学のジャン・クロード・パリアントが「ガストン・バシュラールにおける合理主義と存在論」というテーマで研究発表を行っている。
- (3) *La Flamme d'une Chandelle*, P. U. F. 1975, p. 54.
- (4) *La Poétique de la rêverie*, P. U. F. 1974, p. 103.
- (5) *ibid.*, p. 85.
- (6) *La Flamme d'une chandelle*, p. 111.
- (7) *ibid.*, p. 55.
- (8) *ibid.*, p. 112.
- (9) 一九六二年二月十日の、ラジオ・フランスのインタヴューだと思われる。これはバシュラールが生前に残した最後の録音である。
- (10) *La Terre et les rêveries du repos*, José Corti, 1980, p. 332.
- (11) *La Flamme d'une chandelle*, pp. 111-112.
- (12) 南仏の都市、エクサン・プロヴァンスのこと。
- (13) ゾフィー（一七八二—一七九七）。ノヴァリスの最初の婚約者。彼女との恋愛と彼女の死が詩人ノヴァリスに大きな影響を与えた。
- (14) 一八四八年に発表された、バルザックの『現代史の裏面』の第二部。
- (15) レイセルベルへ夫人の手記。画家である夫とともにジッドと家族ぐるみの付き合いをして手記を書いた。プチット・ダムは夫人の愛称である。
- (16) *L'Intuition de l'Instant*, Gonthier, 1971, p. 95.
- (17) *ibid.*, p. 91.
- (18) *ibid.*, p. 90.
- (19) *ibid.*, pp. 90-91.
- (20) *ibid.*, p. 91.

- (21) *ibid.*, p. 92.
- (22) *ibid.*, p. 93.
- (23) *ibid.*, p. 100.